

朝日大学における教養教育の在り方 ～日本語教育について～

森下伊三男・服部哲明・亀谷みゆき・米田真理

朝日大学教養教育開発室

Approach to Liberal Arts Education in ASAHI University: in the area of Japanese Language Teaching

MORISHITA Isao, HATTORI Tetsuaki, KAMEGAI Miyuki, and YONEDA Mari

Development Office of Liberal Arts Education, ASAHI University

朝日大学教養教育開発室（以下「開発室」という。）は、発足から一般教育課程における英語教育の在り方について調査研究をおこない、その成果を「朝日大学一般教育紀要第42号」^[1]にて報告した。その後、一般教育に限らず、大学教育の場における日本語教育の在り方について調査検討を行い今日に至っている。本稿は、開発室が2019年1月31日付で学長に提出した報告書を基に、更に日本語教育についての方向性を開発室で検討しまとめたものである。

本大学の教養教育は、人文科学・社会科学・自然科学・語学・保健体育等の広い分野・領域を占めているが、本稿では、それらの教養教育に限らず、専門教育を含めたあらゆる教育活動において日本語教育を推進していくための指針を検討した。その結果として、縦軸に「文字情報」・「音声情報」、横軸に「理解する (Input)」・「表現する (Output)」をとり、そこにさまざまな日本語活動をマッピングし、それらの活動を有機的に結び付ける図を作成した。その図をベースに何種類かの科目について、本来の科目指導とともに付带的に指導できる日本語活動とその流れを具体的に示した。それらの図を活用することにより、朝日大学での日本語教育活動がますます充実し、学生の日本語力増強に繋がることを期待している。

==== キーワード =====

日本語教育の視点（教育内容と教育方法）

教養教育・専門教育における日本語教育

日本語教育における諸活動のマッピング

日本語教育活動の有機的な結び付き

1. はじめに

2015年度第9回総合協議会（2016年2月24日開催）において、本大学における教養教育の調査・検討並びに評価・改善を実施するための体制が見直された。

具体的には、①教養教育に関し、質の高い授業を実現するための教養科目内容・方法等の改善及び教養教育の責任ある実施体制を確立するために、教養教育開発室（以下「開発室」という。）を設置し、所要の調査・検討を行うこと、②本大学の教養教育について評価・改善を提言することを目的として「教養教育評価会議」を設置して外部の有識者から意見を聴取し、教養教育の改善・充実に努めることが協議された。

その後、2016年4月1日に開発室が設置され、同年4月26日に第1回開発室会議を開催し、教養教育としての英語教育についての検討を開始した。その後、授業参観や英語科教員との面談、意見聴取等を行って報告書を作成し、学長への提出や教養教育評価会議を経て2017年10月18日開催の総合協議会で報告した。更に2017年度第7回FD研修会（2018年1月23日）において、「朝日大学における教養教育（特に英語教育）の在り方について」の報告を行い、その内容は「朝日大学における教養教育の在り方－英語教育について－ Approach to Liberal Arts Education in ASAHI University ～in the area of English teaching～」^[1]に掲載された。

第7回FD研修会でのアンケートでは、「英語だけでなく日本人の日本語力、日本語コミュニケーション力についての話があればと思います。日本人なら当たり前でできると思われていますが、就職を前にして思っている以上にできていないのではないかと思うことが何度もありました。」のような日本語力に関する意見が複数あった。

そのような意見を反映し、開発室では、専門教育を支える土台となりうる基礎教育、また社会人となるために必要な資質能力として、朝日大学学生（留学生を除く）の日本語力の実態と先生方の思いについて調査を実施することとした。その調査結果の分析を基に、今後の朝日大学における日本語教育についての検討を重ね、2019年1月31日に「朝日大学における教養教育（特に学生に求める国語力）の在り方について（報告）」をまとめ、学長に報告した。その後、更に検討を重ね、さまざまな授業形態や学生指導の場面での日本語教育の在り方を具体的にまとめたものを本稿として報告する。

国語力については、2004年2月3日に文化審議会からの答申「これからの時代に求められる国語力について」^[2]がある。そこでは、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の4つの力によって構成される「国語力」を二つの領域、すなわち、一つは、それらの力について、言語を中心とした情報を「処理・操作する領域」、他の一つは、それらの力を支え、基盤となる「国語の知識等の領域」と捉えられている。そして、それら4つの力が具体的な言語活動として発想されたものが、「聞く」「読む」「話す」「書く」という行為であり、この言語活動は「音声言語情報」と「文字言語情報」に対して処理・操作する活動と考えられている。本稿

では、これら4つの行為を推進する力として「聞く力」「読む力」「話す力」「書く力」とし、その力を養成することを目的に、「文字」「音声」情報に対して、「理解する」「表現する」という組み合わせで、言語活動を組み立てた。そして、第3章で述べるようにさまざまな教育指導の場面において、これら言語活動を有機的に結び付けることを試みた。

本稿では、2. で学長への報告書の一部を引用し、その内容について詳細を示し、3. で具体的に教育指導のさまざまな場面で日本語教育を推進するための方策、言語活動の組み立てについて開発室で検討した結果を述べる。

2. アンケート調査の結果及び評価（学長への報告書の概略）

ここでは、2019年1月31日に学長へ提出した報告書から、調査及び分析の部分を引用して紹介する。この調査は、2018年5月17日から6月9日までの期間、全学231名の教員に依頼し、128通の回答（55.4%）を得たものである。以下の——の行で括られた部分が報告書からの引用（読みやすさのために、一部のフォーマットや語句表現を変更した）である。

2-1 学生（留学生を除く）の日本語力の評価について

まず、アンケート結果の全体像は以下のとおりである。

最初のアンケート設問「現在教えている学生の日本語力についてどう評価していますか。」では、＜高い・やや高い・やや低い・低い＞の4段階評価に対して、＜やや高い＞の評価は8%、＜やや低い＞は75%、＜低い＞は17%の結果であった。

また、＜高い＞と評価した教員は0%であった。学生の個人差は大きく、全体の評価は出しにくいという意見もあったが、本大学教員の92%が＜やや低い＞＜低い＞と評価した。

このように評価した具体的な学生の姿としては、アンケートの設問「学生とのどのようなやり取りから評価しましたか。」によって、本大学教員は学生との授業中のやり取りや提出レポート等の日本語力のレベルや学生の表現する場での姿を通して、＜やや低い＞或いは＜低い＞と感じていることが分かった。

日本語にかかわる能力ごとの教員評価については、設問「学生の日本語力に関して、次の能力についてどのように評価していますか。」で、能力ごとに10段階評価のどのレベルかを調査した。調査結果は、右表のとおりである。それぞれの評価については、情緒的な評価となったが、特に低く評価された「言語事項3.77」や「コミュニケーションする力4.27」、「読む力4.31」は問題と考えられる。

能力ごとに対する教員の意見としては、設問「学生とのどのよう

能力ごとの教員評価

| | |
|--------------|------|
| 聞く力 | 4.52 |
| 読む力 | 4.31 |
| 話す力 | 4.54 |
| 書く力 | 4.52 |
| コミュニケーションする力 | 4.27 |
| 言語事項 | 3.77 |

なやり取りから評価しましたか。」の回答から整理した。「読む力」については、「漢字の読み書きができない」、「書く力」については「漢字が書けない、文法がでたらめ」、「書き言葉が理解できていない」、「文章が書けない」、「聞く力・話す力・コミュニケーションする力」については、「敬語、丁寧語が使えない」、「必要な話し方ができない」、「コミュニケーションに参加できない」、最後に、「言語事項」については、「使える漢字、語彙が少ない」、「文法が理解できていない」という意見であった。

2-2 朝日大学学生の日本語力の実態にあわせた指導の実際

続いて、具体的な言語指導の内容について、それぞれの力に関連して「教材の工夫」、「技術の指導」、「指導の工夫」の項目をたて、具体的な内容を取り出し、最後に総合的な評価を与えている。

アンケート設問「あなたは授業の中で、学生の日本語力を確かめたり向上させたりするためにどのような指導を大切にしていますか。」で、本大学教員が現在行っている指導を明らかにしようとした。

(1) 読む力にかかわって

「教材の工夫」：朝日新聞時事ワークシート（筆者注：本稿では、以下「AWS」^[4]と略す）の使用、書籍やDVD等教材の積極的な取り入れ、図や表、スライドの文章による表現の取り入れ、イメージしやすいような言葉と写真や図等の併記

「技術の指導」：キーセンテンスの見つけ方指導、文章要約の練習指導、中学国語（日本語）の学習内容の復習

「指導の工夫」：レジュメの作成、教科書の音読の位置付け、資料を読ませながら自分の言葉での言語化、読書の習慣を付けさせるため図書館の利用、レポートに書かれている内容の口頭での確認、模範解答と誤った解答の提示・解説、板書をベースにしたノートの作成、“書いて覚える”指導、文章や問題をしっかり読むよう指導、具体的で平易な文章の提示

(2) 書く力にかかわって

「教材の工夫」：小テストでの記述の位置付け、指定した用語を用いた記述問題の導入論述問題の出題、文章力を高めるためワークシートの取り入れ

「技術の指導」：文章の組み立ての指導、作文の手引きの指導、履歴書の個別指導・レポートの書き方指導、助詞、接続語の使い方の指導

「指導の工夫」：作文やレポートの位置付け（書く経験）、自分の文章へのその場での推敲、一言一句残らずノートをとる指導（要約・まとめは不要）、提出された課題につ

いてコメントの記述・返却、提出課題の文章添削、ゼミにおける作文指導の徹底、全体講評によるフィードバック、講義内容をまとめさせたレポートの提出、不十分な者へのレポート再提出

(3)～(5) 聞く力・話す力・コミュニケーションする力にかかわって

「教材の工夫」：思考を促す発問（答えが一つに限らない発問）の心がけ、自分やグループの意見を書かせたノートやホワイトボードを活用した授業（可視化）

「技術の指導」：聞く・読む・話す・書くことの重要性の指導、ディベートやディスカッション、プレゼンテーションの指導、話し方のこつこのレクチャー、主語述語をしっかり意識した聞き方・話し方の指導

「指導の工夫」：発表の位置付け、報告と討論を中心に行うゼミの指導（レジユメを用意）、質問に対する全員の発言、聞いた説明を自分の言葉で説明できるかの確認、グループ討議の導入、チームを形成し討論させ内容をまとめさせる指導

(6) 言語事項にかかわって

「技術の指導」：適切な言葉の使用の指導

「指導の工夫」：「てにをは」尻切れにならない発言の指導、主語や目的語、「てにをは」等の指導の継続、漢字の音読、専門用語を漢字の意味から解説

本大学教員は、日本語力の向上を図るため、教科書以外の教材を工夫したり、具体的な技術指導を取り入れたりしながら、「聞く力・読む力・話す力・書く力・コミュニケーションする力」にかかわる具体的な言語活動を授業に位置付け、レポート等の添削や返却もきめ細かく丁寧に行っていることが分かる。

2-3 アンケート結果の評価

報告書の最後では、日本語教育に限らず、教養教育の在り方を以下のように振り返っている。さらに、ここでは、学生に必要となる資質・能力について①から③で具体的に明示し、それらを育成することを教員に求めている。

以上のようにアンケート調査の結果を整理してきたが、「朝日大学における教養教育の在り方－英語教育について－ Approach to Liberal Arts Education in ASAHI University ～ in the area of English teaching ～」（朝日大学一般教育紀要 第42号）の「3. 朝日大学における教養教育の考え方」で示した内容を確認したい。

…「本大学における教養教育についても、2. で述べた教育改革の流れに遅れることなく、着実に評価・改善を続けていくことが必要である。グローバル社会に対応できる人材は、幅広い知識と様々な課題に対し自ら考え、判断し、その解決策を主張できるコミュニケーション

能力が不可欠である。」

…「本大学においても、このような教育改革の流れや『新しい時代における教養教育の在り方』に沿って、知的な側面のみならず、規範意識と倫理性、感性と美意識、主体的に行動する力、バランス感覚、体力や精神力等を含めた総合的な学びについて、教養教育の充実を図ることで社会に貢献できる人材育成につながると考える。この考え方は、本大学における建学の精神『国際未来社会を切り開く社会性と創造性、そして、人間的知性に富む人材の育成』の具現に向けた教育をより強固にすることになり、本大学が地域社会に認められる、より個性豊かで魅力あふれる大学となることに繋がるものである。」

…「本大学における教養教育の考え方として、以下のような資質・能力を育成する教育を実践することが必須である。

- ①学生が学ぶ意欲を持ち、社会とのかかわりの中で、習得した知識や能力を活用しようとする態度を醸成すること
 - ②学生が自ら課題を発見し、自ら考え、主体的に判断し、行動するなどして、よりよく課題を解決する資質・能力を身に付けること
 - ③学生が論理的及び批判的思考力・判断力・表現力・行動力・実行力等を身に付けること
- 教養教育では、開講される様々な授業科目をとおして、これらの資質・能力が育成できるようなシラバスの作成、授業の展開を考えていかなければならない。」

そして、学生を指導する教員に対し、以下のようなメッセージを発して報告書をまとめている。

私たちは、学生の日本語力の不十分さについて高等学校以前に身に付けていなければならぬとその習熟の低さを嘆くのではなく、目の前の学生たちを社会に貢献できる人材として育成するために、本大学全ての教員が、授業や教育活動の中で、学生の日本語力を確かめ向上させるための指導を積み重ねていくことが求められている。

今回の調査に回答いただいた本大学教員が実践している日本語力向上の営みなど等を参考に、学生の資質・能力を高めていく指導を本大学全ての教員が継続する必要がある。また、学生の日本語力把握とそれに基づいた適切な指導や支援を行うために、入学時における日本語力を判定するテスト或いは調査等を実施することも考える必要がある。

この中で引用されている『教員は授業や教育活動の中で、学生の日本語力を確かめ向上させるための指導を積み重ねていくことが求められている。』を深く受け止め、開発室では、教員がどのような機会に、学生のためにどのような指導ができるのか、について検討した。次章でその結果について述べていく。

3. 日本語指導の方向性

第2章でみてきたように、現状では、学生の日本語力に対する教員の評価は高くなく、また、本大学で実施したPROGの言語処理能力の平均レベルは2.8(全国平均3.4)となっている^[3]。しかし、一方では個人差が大きいことも明らかになっている。学生の日本語力不足の原因の一つとして大学以前の教育や入試制度をあげることもできるが、ここでは、それらに対する方策を考えるのではなく、学生の日本語力を向上させるために、教育の現場で教員ができることは何か、について考えていく。

アンケート調査の結果やシラバスから読み取れる内容として、教員は学生の日本語力を育成するために、授業での指導やその他の教育活動におけるさまざまな場面で工夫をしていることがわかった。表1は、日本語のさまざまな指導内容について、どのような機会にどのような指導がされているかをまとめたものである。

表1では、「指導の分類」として、以下のような代表的な指導を取り上げている。

- ・講義や講演あるいは発表を聞くときに必要となる「聞くこと」についての指導
- ・読む力の基本となる「読むこと」に関する指導
- ・発表や討論等で必要となる「話すこと」についての指導
- ・資料の作成等で必要となる「書くこと」についての指導
- ・日本語の基礎となる「語彙」に関する指導
- ・日本語の基礎となる「文法」に関する指導
- ・日本語で書いたり話したりする場面で特に注意を必要とする「敬語」についての指導
- ・「その他」として社会で特に必要とされているコミュニケーション力に関する指導

それぞれの指導の具体的な内容を「指導の内容」として書き出した。これら以外にもあると思われるが、ここでは、アンケートの結果を中心に見出された内容について列挙した。ちなみに、「目指す力」ではこれらの内容を簡潔に「〇〇する力」として表現した。

これらの指導内容を実践する代表的な場面として、六つを「実践場面」に取り上げ、それぞれの指導内容に対応する具体的な活動を示した。これらは代表的な活動であり、全ての活動が有機的に結び付いており、空白の部分でも何らかの活動が存在していることも意識しておかなければならない。例えば、少人数のクラスであるゼミや演習・実習等では幅広い内容についての指導がなされているが、図書館を利用した演習等では、その活動が限定的になることが予想される。また、授業の中で実施されるプレゼンテーションやグループ討論等では、発言する学生の「話す力」とそれを聞く学生の「聞く力」、さらには聞いた内容を書き取り、発言に対して質問し、その質問に対して回答するという「質疑応答力」等のさまざまな力が必要となる。これらをまとめると「コミュニケーション力」ということになるが、その他の活動でも、各活動が有機的に結び付き、一体として指導していくことを考慮すると、表1はあくまで代表的な

表1 日本語指導の内容と授業などの活動との対応

| 指導の分類 | 聞くこと | 読むこと | 話すこと | 書くこと |
|--------------|-----------|------------------------|--------|--------------|
| 指導の内容 | 聞き取り | 教科書、図書、新聞、資料 | 口語体、話法 | 文語体、書法、修辭法 |
| 目指す力 | 聞く力 | 読む力 | 話す力 | 書く力 |
| 少人数ゼミ・演習・実習 | 発表を聞く | AWS（新聞の読み解き、天声人語の読み解き） | 発表する | 発表資料・報告書の作成 |
| 建学の精神 | 講師の講演 | | | 報告書の作成 |
| 講義 | 聴講 | 課題図書 | グループ討論 | テイクノート、要約の作成 |
| 多人数の演習・実習 | 発表を聞く | 資料の読解 | グループ討論 | 報告書・発表資料の作成 |
| 課外活動・学外研修・見学 | 講師等の説明を聞く | 資料の読解 | | 報告書の作成 |
| 図書館利用の演習等 | | 読書指導 | | 感想文等の作成 |

AWS：朝日新聞時事ワークシート

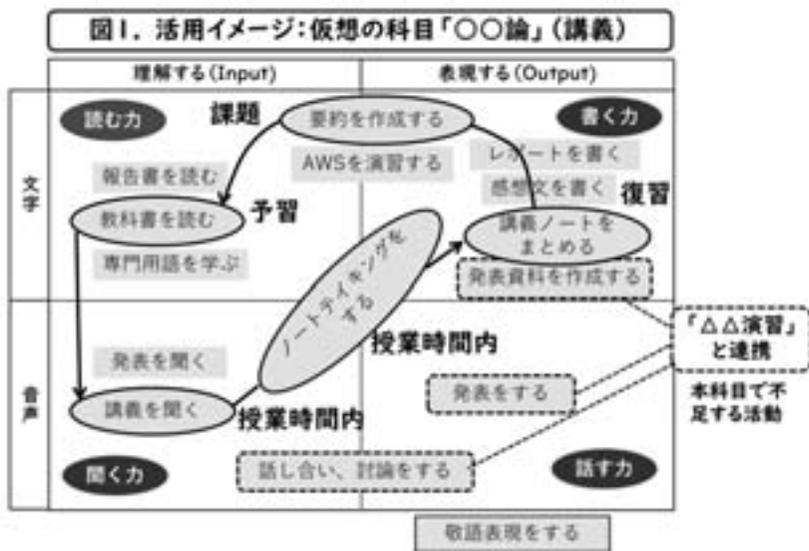
| 指導の分類 | 語彙（漢字、用語） | 文法（口語、文語） | 敬語 | その他 |
|--------------|-------------------------|------------------------|--------------------|--------------|
| 指導の内容 | 読み書き、誤字脱字、同音異義語、用語・語彙増強 | 主述の関係、接続詞、助詞（てにをは）、句読点 | 尊敬語、謙讓語、丁寧語を適正に使う力 | コミュニケーション対話法 |
| 目指す力 | 読む力、書く力 | 話す力、書く力 | 話す力、書く力 | 聞く力、話す力 |
| 少人数ゼミ・演習・実習 | AWS（天声人語漢字、天声人語読み解き） | AWS（新聞の読み解き、天声人語の読み解き） | * | プレゼンテーション |
| 建学の精神 | | レポート作成・添削 | | |
| 講義 | | 課題の提出・添削 | | グループ討論 |
| 多人数の演習・実習 | | | | グループ討論 |
| 課外活動・学外研修・見学 | | | 部外者への対応 | |
| 図書館利用の演習等 | | | | |

* 授業時に教員からOJT

内容を取り出したものに過ぎず、実際の指導現場では、これらの指導内容は互いに独立させるのではなく有機的に関連させて指導を進めていかなければならない。

表1をベースに、開発室では日本語の表現媒体及びそれらが表現する情報を含めて、ここでは縦軸を「文字」と「音声」とし、横軸を「理解する (Input)」と「表現する (Output)」とした4つの領域をもった図を考えた。文字媒体とそれが表現する文字情報をまとめて「文字」、音声媒体とそれが表現する音声情報をまとめて「音声」と表示した。また、横軸は、学習者が文字情報・音声情報を理解し、その内容を習得していく、すなわち、学習者への入力 (Input) であるから「理解する (Input)」、学習者が学んだ知識等を文字情報・音声情報として外部に表現していく、すなわち、学習者から外部への出力 (Output) であるから「表現する (Output)」と表示した。表1に示した代表的な言語活動について、この図の中でポジショニングを行った。さらに、図の中へ、講義等の指導機会にこれらの活動を有機的に結び付けていくために想定される活動の流れ (指導の流れ) を矢印付き太線で加えた。

図1はその一般的なパターンを示すイメージ図である。左上の領域は文字情報を読み込んで「理解する (Input)」の領域である。この領域は「読む力」に関連した活動で、主な活動は報告書や教科書あるいは専門書を読むこと・内容を理解すること、それらを通して専門用語も理解し習得することである。右上の領域は文字情報を紙媒体やパソコンのソフトウェアによる電子媒体へ書き出して「表現する (Output)」の領域である。この領域では、感想文やレポートを書いたり、発表のための資料を作成したりし、論理的な表現や適切な構成を組み立てる活動を挙げることができる。また、左上の領域と連携し、読むことに加え、読み込んだ内容を咀嚼し要約として書き出していくという一連の活動 (図では、「要約を作成する」とした) も考え



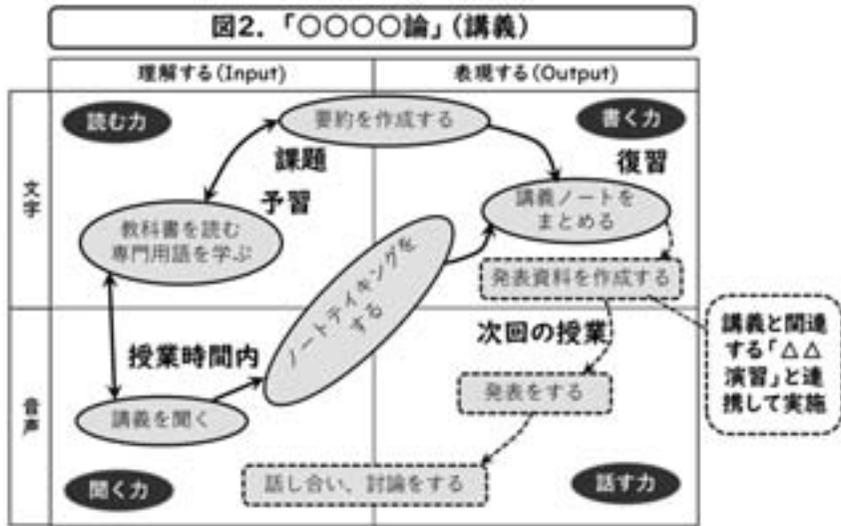
られる。さらに、本大学が契約しているAWSの活用により、新聞記事の読み解きや天声人語を題材とした読み書き、図表やグラフを題材とした記述式解答等の文字情報の理解を目的とした演習や表現を目的とした演習もある。あるいは、左下の領域と関連して、講義等を聞いてノートテイキングをし、それを講義ノートとしてまとめる、という活動も考えられる。この左下の領域は、音声媒体の情報について、聞き取って「理解をする (Input)」の活動領域であり、ゼミ等で他学生の発表を聞いたり、講義を聞いたりする活動をあげることができる。

また、特別なケースとしては、学外見学等で訪問先の関係担当者等からさまざまな解説・案内・説明等を聞くという活動も考えられる。右下の領域は、音声媒体で情報を「表現する (Output)」の領域で、右上の領域で作成した発表原稿を用いて口頭発表したり、自己紹介等をしたりする活動が中心となる。音声情報による発言は、左側の領域と関連し、聞いた内容について質問したり、あるいは、他学生の発言を注意深く聞いたりする活動と密接に結び付き、図1では、「話し合い、討論する」として両領域にまたがる活動とした。この活動には、当然のことながら、他者の発言を聞きながらメモをする活動や発表時の資料を読み解く活動等、文字媒体に関連した活動が伴うことが多く、先に述べたように、あらゆる活動が有機的に結び付いていることを理解しておく必要がある。ただし、この図にそれらも加えると図自体が複雑かつ煩雑となり読み取りづらくなることを考慮して図からは省略してある。

以上のように、各領域に配置された活動について、例えば講義を想定した時に主となる各活動を楕円枠で囲み、それらの活動を関連付けて結び付けていく矢印付き太線を重ね合わせ、いわゆる活動の流れを図1に追加した。講義の授業形態では、事前の予習として教科書を読み、その後、講義を聞きながら、ノートテイキングをし、その後に講義ノートとしてまとめる。また、復習や課題の答案作成あるいは次回の講義の予習として、講義の要約を作成したり、教科書を読み進めたりする循環が生じることになる。これらの活動及びその流れに対して、講義という授業形態では不足する活動として、破線枠で囲った活動があり、これは講義に対応する演習科目等で補うことが期待される。図1の場合、講義ノートを参考に発表資料を作成して演習の時間に発表し、クラス内で討論する等の活動が考えられる。

また、右側にある「表現する (Output)」の領域で、音声と文字の両領域に関連して、枠外に挙げた「敬語表現をする」という活動がある。この活動はアンケート調査からも明らかになったように、学生が敬語（尊敬語、謙譲語、丁寧語）をうまく使えない、ということに対応した活動であり、図1内の4領域のすべてに関わる活動として、各言語事項を習得する活動と共に必要とされる活動である。なお、ここでの言語事項とは、語彙として、漢字の読み書き、同音異義語の使用、用語の活用、文法事項として、主語述語の関係、接続詞・助詞、句読点の適正な利用等を挙げることができる。

開発室では、図1を基本図として、表1で掲げた代表的な実践場面における言語活動につい

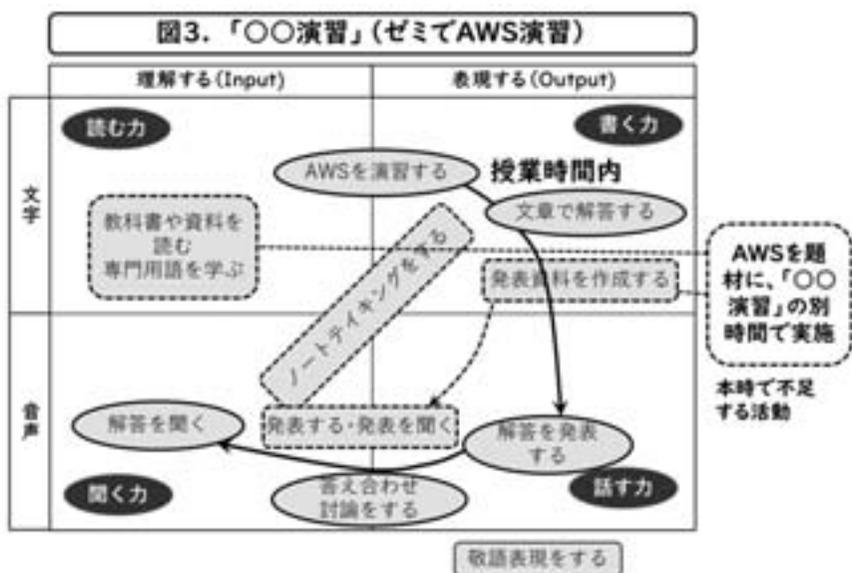


て、本大学教員が教育指導や学生指導時に実践している日本語指導の参考となることを企図して、以下の図2～図9を作成した。

図2は、図1と重複する部分が多いが、一般的な講義科目のパターンである。ここでは、学生は講義を聞き、その場でノートテイキングをし、復習として講義ノートをまとめ、課題である講義内容の要約の作成をする。そして、予習として教科書の読み進めや、次の講義の準備をする、という活動の流れである。不足する活動は講義科目と関連する演習科目等で補うことを想定した。また、これらの活動を学生が進めるにあたり、対応する力を学生が身に付けられるように、教員は学生の書いた要約や講義ノート・発表資料等を添削したり、発表時の内容や表現等を指導したり、講義の内容や講義で現れた専門用語の教授等をしたりする指導が求められる。

図3は、比較的少人数で開講される基礎演習（基礎ゼミ）や専門演習（専門ゼミ）等の演習科目のパターンである。演習での活動にはさまざまなパターンがあり、この図は演習でAWSを活用した授業を実施する場面を想定した図である。授業では、学生はAWSの演習を通して文字情報の読解を進め、短答・記述・漢字の読み書き・キーワード探し・空所補充等の設問に取り組む。演習の活動としては、各学生に自分の考え等を発表させ、互いに議論をすることが考えられる。また、破線で示したように、AWSの記事やニュースの内容を更に掘り下げて調べることにより、文字情報を理解する力を養い、資料を作成し、授業時間に発表することで、更に活動を深めることができる。この活動は、次の図4で示す課題学習に繋がるものである。

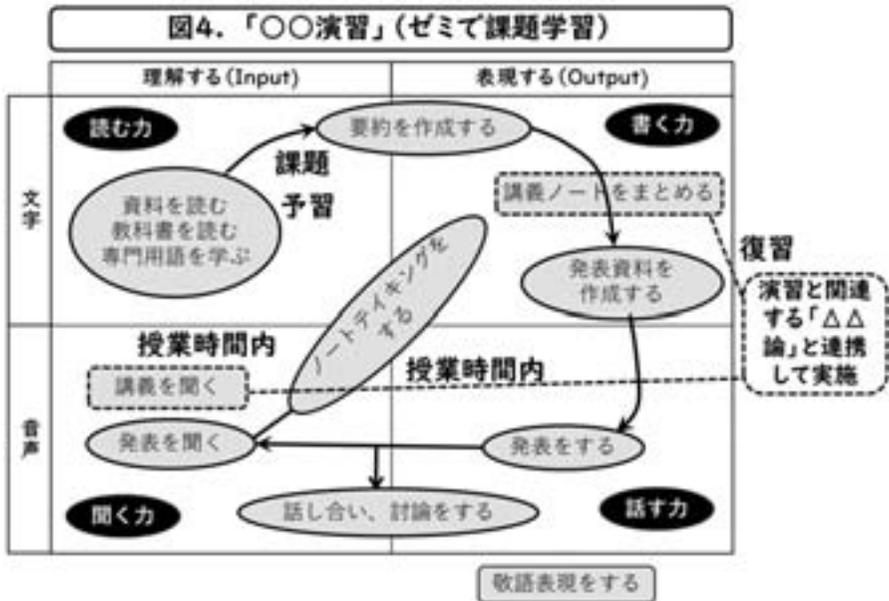
図4は、図3と同様に、比較的少人数で開講される基礎演習（基礎ゼミ）や専門演習（専門ゼミ）等の演習科目で課題学習を中心としたパターンである。この演習では、予習としてある課題を中心に資料や教科書等を読み解き、その内容の要約を作成する。それを基に、発表資料



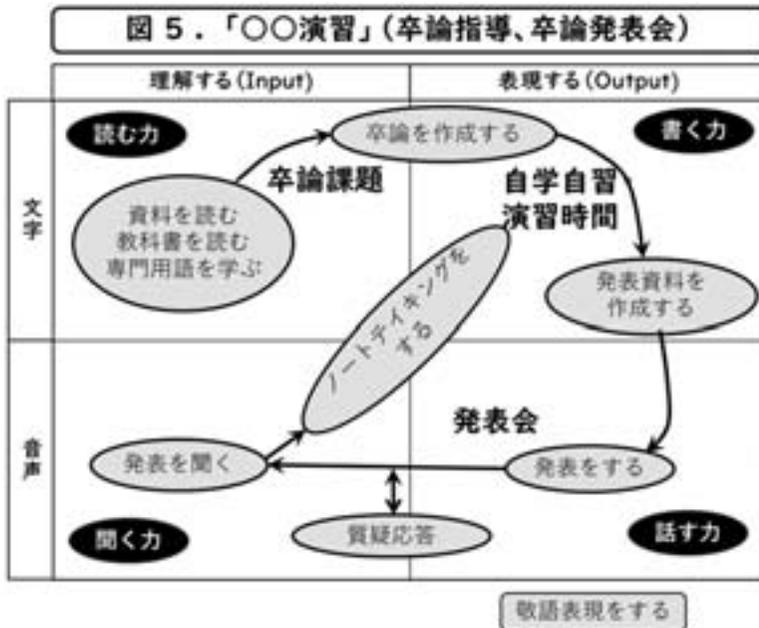
を予習あるいは授業時に作成する。授業では担当学生は準備した内容を発表し、他の学生は発表を聞きながらノートテイキングを進め、さらに、発表に沿って話し合いや討論を進める活動となる。各活動において、グループワークを行う場合には、グループ内での話し合いや討論による資料作成等も考えられる。また、課題の内容によっては、演習と関連する講義を聞き、講義ノートとしてまとめ、それを発表資料に結び付ける活動も想定できる。

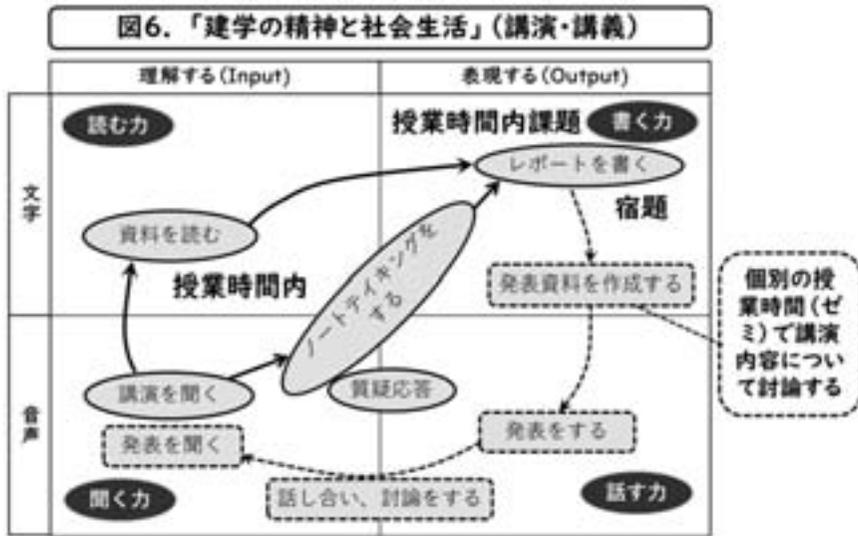
図5も、図4と同様に、比較的少人数で開講される専門演習（専門ゼミ）等で卒業研究や卒業論文指導を中心としたパターンである。この演習では、卒業研究や卒業論文の課題について、資料や教科書等を読み、分析や考察を経て研究報告書や卒業論文を作成する。この過程では、学問的な内容の指導の方に重点があり、日本語の指導は付随的なものになる。卒業論文の完成と共に、研究室や分野内での論文発表会等が実施される場合には、発表資料の作成も必要となる。これらの活動は演習の時間のみならず自主的な学習も必要となり、日本語指導も個々の学生に応じる必要がある。この後、発表会等の開催時には、発表をする学生、聞く学生、教員との間での質疑応答等が考えられ、教員はそこでの日本語の扱いについて指導をすることになる。また、発表を聞く学生にとっては発表を聞きながらノートテイキングを通して日本語力の増強を図ることができる。枠外に掲げたように、全体にわたり敬語表現についても指導をすることができる。この図には示していないが、報告書や卒業論文を作成する過程で、外部への聞き取り調査やアンケート調査が実施される場合には、それに対応した言語活動に関する指導が必要となることを考慮しておくことも大切である。

図6は、例えば「建学の精神と社会生活」の授業のように大教室で実施される講演形式の授業科目のパターンである。授業では始めに学外講師を含めた講師による講演が開かれる。学生



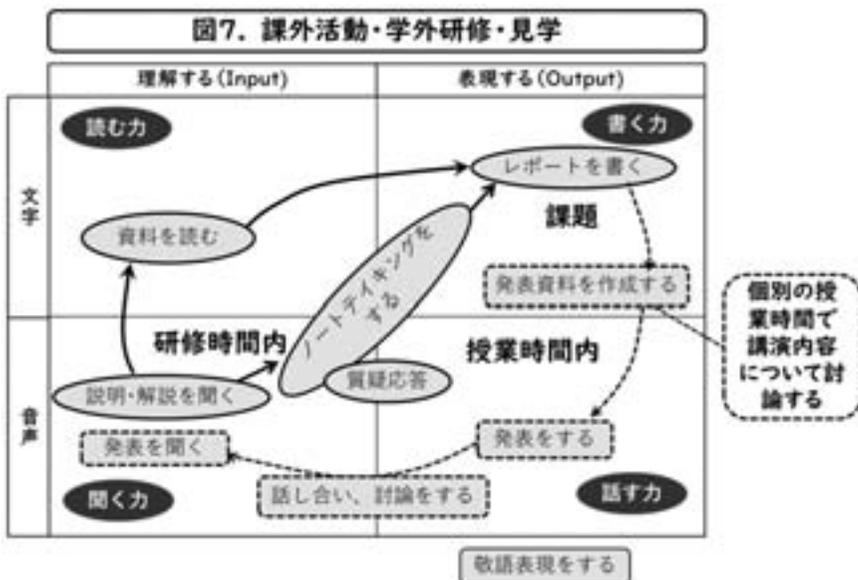
は講演を聞きながらノートテイキングをし、また配付された資料を読み解いていく。これらを基に、受講レポートを書いて提出をする。また、講演中あるいは講演後に行われる質疑応答の時には、質問したいことを適切に言葉に表現するための“質問する力”が必要となる。その後、同科目における個別授業（担当教員ごとの個別ゼミ等）が開かれる場合には、講演内容につい

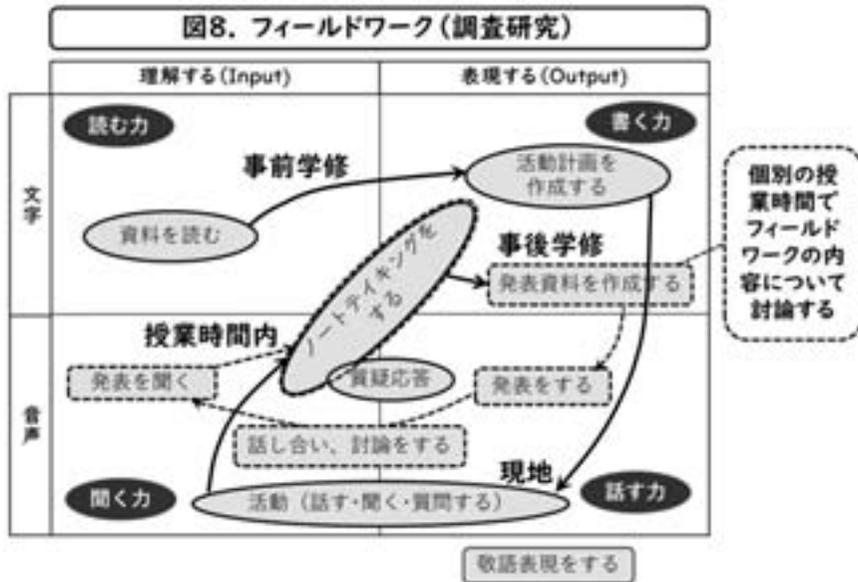




での発表会等を開くことによって、レポートを基に各学生による発表や討論等が行われる。これは、図3の演習科目のパターンと同様と考えることができる。

図7は、課外活動や学外研修あるいは見学等、学外に出て施設等を訪問した時、その施設の職員等からいろいろな説明・解説を受ける場面、さらに、大学に戻ってきた後、訪問・見学等で得られた情報や知見を発表する場面を想定した活動である。図7では、“説明・解説を聞く”ことからスタートしているが、その前に、個別の授業時間に事前学習として資料を収集したり、

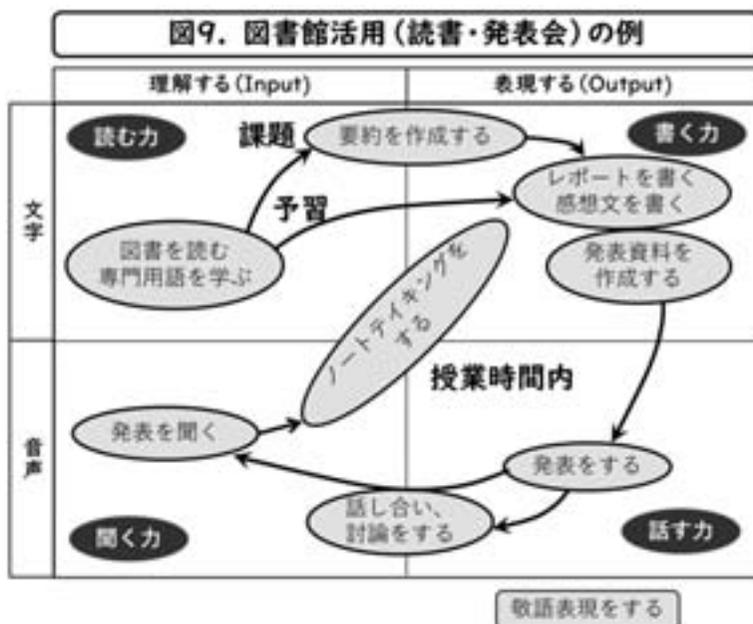




参加者で話し合いをしたりすることも考えられる。それらの活動については、図の複雑・煩雑化を避けるためにここでは表示を省略したが、大切な活動であることには変わりはない。研修時間には、説明・解説を聞きながらノートテイキング、研修時に配付される資料の読み込み、あるいは施設の職員に対して質問をする等の言語活動が考えられる。特に質疑応答では、枠外にある敬語表現についての指導が大切となる。研修後は課題としての研修レポートや発表会に向けての資料作成時に日本語指導が欠かせない。発表会等での言語活動については、前述の複数の図にも現れるパターンと同様である。

図8は、フィールドワークとして学外での調査の実施に伴う言語活動の場合である。このパターンでも、課外活動や学外見学等と同様に、事前の資料収集や資料を読み込む時、活動計画を作成する時等に言語指導が必要となる。そして現地では、対象者からの聞き取りや質疑応答に伴う言語活動に対する指導が考えられる。さらに、事後学習として調査結果をまとめたり、資料を作成したりして発表する等の活動が考えられるが、これについても前述の図にある活動と同様である。

図9は、図書館を活用して文献検索による資料の収集や解読等を中心としたパターンである。図書や資料を読むことからスタートし、要約の作成、レポートあるいは感想文の作成に進む。特に、図書館に設置されているラーニング・commonsでは、文献を活用したグループワークの実施が容易であり、一般の教室での授業とは異なる言語活動が実施できる。また、図9には示していないが、文献検索に伴って、キーワードの選び方等、語彙の扱いに関わる言語指導も可能である。



4. おわりに

本稿では、本大学において、さまざまな場面で行われている教育活動の中で、一連の流れとして、日本語教育自体を目的とした教育活動ではなく、既存の授業科目として教育活動の中に、通奏低音のように取り込むことができる日本語教育について検討した。ここでは、日本語力の要素を「聞く力」「読む力」「話す力」「書く力」の4つの力について、「音声情報」「文字情報」を縦軸に、「理解する (Input)」「表現する (Output)」を横軸にした基本図を作成した。そこから発展させて、具体的な場面を想定して言語活動をあてはめ、それらを有機的に一連の流れとして結び付ける図の作成を試みた。本稿で示した図は、あくまで一例であり、これらの図をベースに、諸先生方の創意と工夫によって、また、教育活動の目的や方法によって、更に深みのある図が描けるものと確信している。今回示した図が、諸先生方にとって「学生のための日本語教育」を進める上での一助となることを開発室として期待をるところである。

参考文献

- [1] 森下伊三男、横山博信、服部哲明、田村明、亀谷みゆき (2017) 「朝日大学における教養教育の在り方—英語教育について—」朝日大学一般教育紀要 No.42、1-11、2017
- [2] 文化庁 (平成16年2月3日) 「これからの時代に求められる国語力について」文化審議会答申
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/kokugoryoku_

tosin.pdf

- [3] 2020年度第8回FD研修会(2021年1月19日開催)、2020年9月～10月に1年生を対象として実施されたPROGの実施結果から、「言語処理能力」のスコアが全学部平均2.9(全国平均3.4)と報告された。なお、学科別では、法学科2.8、経営学科2.7、看護学科3.1、健康スポーツ科学科2.7、歯学科3.7であった。
- [4] 朝日新聞時事ワークシート(AWS)、<https://manabu.asahi.com/worksheet-ol/>
朝日大学では、「英語(長文読解・語彙)」を除く6種類の教材(「新聞の読み解き」、「図表の読み解き」、「最新ユース 早わかり」、「ニュース 要点チェック」、「天声人語 読み解き」、「天声人語 漢字」)を全学で利用できる契約を朝日新聞社 教育総合本部と締結している。